

1956年5月20日、高知市小高坂山の墓地脇に咲くノイバラの白い花を訪れた薄青色の美しいミカドアゲハを白ネット一振りですとめたのが初の出会い。市立青柳中学校科学班の新入一員として、この小山に入ればミカドアゲハが必ず採れると先輩たちに案内してもらった初めての昆虫採集部活での成果で、バラのトゲにネットをひっかけないようにと慎重に迫る際、羽を小刻みにふるわせながら夢中で蜜を吸っていたミカドアゲハの姿がいつまでも鮮明に脳裏によみがえる。結局この日ミカドアゲハを採ったのは筆者だけで、イボタの葉に止まっていたウラゴマダラシジミを捕獲していたのも筆者のみという、先輩たちにはもうしわけない採集行であった。ここから少し北へと自転車を踏んだ円行寺というチョウ密度の濃い場所で新鮮なイシガケチョウが湧き水の流れる路面のあちこちで羽をひろげて吸水していたのもつい昨日のように思い出せる。

小学校5年からひたすらチョウを追ったのが自宅裏から簡単に登れた五台山だが、3年という観察期間中には見たことがないミカドアゲハが、1956年9月開催の高知市昆虫展に他校の小学生による五台山採集標本として出品されていて驚く。この発表を契機として、1957年7月、中学校理科担当の故岡本盛康先生が科学班を率いて五台山におけるミカドアゲハの実態調査を企画され、半日を費やしてもミカドアゲハの発生を裏付ける事実がみつけれないまま竹林寺仁王門前で休憩していたところで、突然先生自らが仁王門上部の横柱に付着する黄緑色の越冬蛹を発見。近くに食樹のオガタマノキがあるはずだと調査を進め、仁王門からは100m以上離れた位置となる、国宝所蔵建物奥の小さな神社境内に大きなオガタマノキがみつきり、木登りの得意な先輩の一人が高いところの葉裏につく新たな越冬蛹をみつけてここでの発生を決定づける。さらに五台山公園内に別のオガタマノキが数本あることまで確認して実態調査を終えたのだが、チョウを採るという行為だけからは得られない、自然界のナゾ解きという数段深い喜びを感じられるチョウ研究の道があることを知った貴重な体験であった。

高知県立追手前高等学校に進学したあとも「五台山のチョウの生態」研究を推し進め、さらに範囲を広げた「高知市内のチョウの生活史研究」へとチョウとのかかわりを一層深めてゆくこととなるが、人の縁とは実に不思議なもので、この高等学校で生物を学んだ担当教諭が高知市のミカドアゲハ特別天然記念物指定に尽力された故橋本清美先生であった。もっともこの特別天然記念物指定は、当時本種の日本における生息分布が三重県などまで及ぶことなど十分調査されていなく、現在、天然記念物指定は妥当ではなかったと評価される。高知市の市役所担当者に確認したところ、当時、わかっていなかった本種の生活史が明らかにされた食樹のある潮江中学校校庭とオガタマノキがある近隣の要法寺境内、及び、本種の定着が確認された筆山公園一帯の地域を限定した特別天然物記念となっていて、これら地域内でのみ採集禁止としているとのことである。

1960年5月21日の高知新聞に「五台山にミカドアゲハ―牧野植物園の山脇技師が発見」という記事が出るが、事実は上に記したとおりで、この春はたまたまミカドアゲハが大発生したため。ところが、残念ながらこんな新聞報道があったせいで大阪や遠くは東京方面からやってきた憎き「チョウ屋」が、食樹をゆすれば驚いて落下する幼虫の習性を利用して大量捕獲をするという状況となり、偶然鉢合わせた筆者はただただあきれ「乱獲はやめましょよ」と苦言を述べるのが精一杯であった。

ミカドアゲハは食樹であるオガタマノキを離れて蛹化する個体がほとんどだと思われ、特に越冬蛹においてその習性が著しく、1961年には食樹の近くに自生する常緑樹サカキの葉裏で複数の越冬自然蛹を確認した。なお、オガタマノキには例年ハバチの一種が大量に競合発生してミカドアゲハの成育を脅かしているが、1990年以降、牧野植物園の稲垣技師らによる五台山公園内へのオガタマノキ植栽努力が



実を結んで、2004年5月現在でも安定した発生を繰り返している。ミカドアゲハの特性でおどろいたこととして、稲垣さんをお願いしてわけていただいたオガタマノキ（背丈約2m）を公園一帯からはるか遠く離れた山の下に位置する筆者の生家裏庭に移植した2003年5月、いきなりこのオガタマノキに20数個が自然産卵された。これは、母チョウの想像を超えた食樹探知能を裏付ける事象である。蝶の発生初期には♀の羽化を期待してオガタマノキを中心に周辺の木々の梢部で蝶道を形成して飛び回る♂の姿を多く見るが、徐々にウツギ、ヘクソカズラ、ウルシ、ノバラ、センダンなどの花を訪れる個体が多くなる。気温が高い日中であれば発生場所から遠く離れた山麓の民家周辺路面での吸水活動も見られ、行動範囲はかなり広い。春型♀は若い葉裏（ときには葉表）に1-2コ、多いときには3-4コを産卵する。筆者による1968年の飼育記録では卵期6日、幼虫期30日、前蛹期2日で、蛹化後多くはそのまま越冬するが、蛹期16日で第二化夏型成蝶となった例もある。自然状態での夏型は6月下旬から8月中旬までの発生例があるが、総体的に夏型の発生率は低い。高砂市における飼育時の知見として、6月末に夏型として自然羽化した蛹が付着していた葉っぱの根元に、通常施される“しっかりと糸を吐いて止める工夫”がなされていなかった観察例があるが、しっかりと糸で止められた葉っぱに付いた蛹から夏型として発生した事例もあり、越冬蛹と夏型として発生する蛹にどういう違いがあるのかは良く分っていない。なお、オガタマノキは五台山唐谷地区に保存されている前首相浜口雄幸の生家庭にも植栽されており、ここでも本種が発生している。珍しい例として、1995年牧野植物園の稲垣技師によってユリノキへの自然産卵が認められ、孵化幼虫の成育まで確認された記録があり、高知新聞の記事になっている。

タイサンボクでの発生例は確認できていない。春型、夏型ともに赤紋型と橙黄紋型とがほぼ同じ比率で見られ、1995年の飼育で橙黄



紋型の♀による産卵個体から赤紋型も発生することを確認し、交尾相手の♂が赤紋型であったものと推定できるが、このときの赤：橙黄色比を正確に把握できていなく、遺伝的には赤紋型が優性だそうだ。

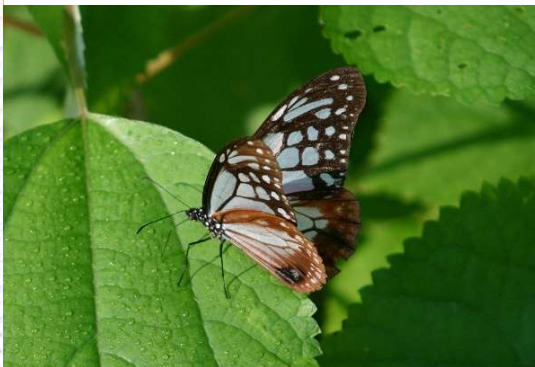
1999年5月中旬に高知市でみつけたミカドアゲハの幼虫を高砂市自宅のオガタマノキで直接樹木に袋がけという自然体で飼育したのが、6月1日から5日にかけて蛹化したが、うち、2頭が6月20、23日と続けて第2化となって羽化したのは予想外。その個体も水色紋が小さくなる夏型ではなく、八重





山諸島産ほど青色が濃くはないけれど水色の濃い春型と同じ大型個体で、さらに 6/20 の個体は中室の上方白色小紋が 1 個消失した珍しいタイプだ。6 月初めにかかなり冷え込み、急に気温が上った時点での自然羽化である。全部で 10 頭の蛹だが、残りはそのまま越冬態勢に入っているように見え、どこにその違いがあるのかとよく観察すると、羽化した蛹がついていた葉っぱの根元には 2 例ともに、終令幼虫が糸を吐いて安定固定を企てた跡のないことが判明。残りの 8 頭は蛹化した葉っぱ根元がすべて糸でしっかり固定されている。ということは蛹化段階でこの夏のうちにチョウになることを決めていたとしか考えられなく非常に興味のある観察結果である。

かつてミカドアゲハが記念切手となった際、その描画の右側前後翅の位置が不自然だとしてデザイン担当の画家が事実をねじまげて誇大に描きすぎていると非難をあげたことがあるが、参考を示す自然状態のアサギマダラの画像で



明らかなように、画家による描写は少しも事実を大きく逸脱してはいないことが分る。ちなみに、ミカドアゲハはその後 15 円通常切手として再登場しており、ミカドアゲハを国指定の特別天然記念物として保護している高知市の百石町郵便局では平成 13 年 9 月 3 日にミカドアゲハをデザインした風景印の押印サービスを開始したようだが、その原画作成が文豪谷崎潤一郎によるというのにはちょっとした驚きを感じる。



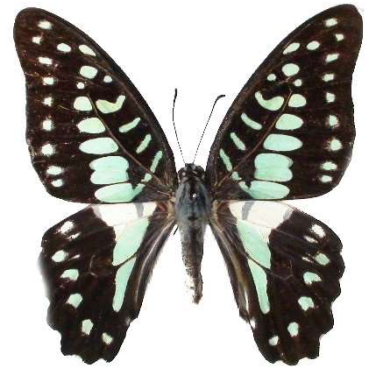
以下に、八重山蝶紀行からミカドアゲハ関連の記載を抜粋。

2004 年 9 月 18 日：石垣島オモト林道。突然目の前が開けて間違いなく公園造成の途中である平地へと出る。1 頭のミカドアゲハ飛翔を追いかけてきて偶然いきついた広場で、そこらじゅうに相当数のミカドアゲハが飛び交っている。気をおちつけてじっくりと全景を確認すると、左前方一番奥の路面にチョウが一团の群れとなって吸水している状況が目に見え込んでくる。明らかにミカドアゲハの集団吸水だ。1997 年に上流側のせまい砂地で数頭の集団吸水を見て以降、まったくこの周辺では見られなくなっていた光景が、あのときの数をはるかに増した大きな集団となって目の前に展開している。全集団は右の写真記録のおよそ 2 倍の規模で、頭数にして約 25 頭。このラッキーチャンスをビデオにもしっかりと記録し、明



日、春日井市からお見えになる高田さんたちをここに案内するときにもこの集団吸水が維持再現されていることを期待する。

2005年9月29日：石垣島オモト林道。昨年以降、この場所から林の奥へと、何の目的か分らないあらたな道が切り開かれているが、木陰が多いその赤茶けた道がどうやらミカドアゲハの蝶道となっていて、濃い青色がいたりきたりしている。路面から一定の距離を保ちながら、それでも微妙に上下幅をともなって飛び交うミカドアゲハを飛翔正面で待ち構えてネットインを図る。こうしたミカドアゲハやアオスジアゲハの飛翔中個体をゲットするには、野球のイチロー並みの動態視力と、ネットを振りぬく際の力加減でチョウの羽を傷めないような高等テクニックが必要だ。ここ数年は、魚釣り具店で求めた”たも網”を転用した丈夫でたわまない枠組みの、しかも口径50cmという大きなネットを活用しているため、ほぼ5割の捕獲率でミカドアゲハをしとめる。その後はチョウの新鮮度を確認し、標本として残すに値しない場合にはそのまま放してやる。そんな中で、いきなり明らかに青色部分が濃い黄色一色のミカドアゲハが現れて、まるで産卵のための食樹を探しているかのような挙動あたりの木々の葉っぱ周りを転々と飛ぶ。ビデオ記録をしようかネットに収めようかと迷っているうちに手の届かない方向へと飛び去られてしまい、強烈な黄色の残像だけがいつまでも脳裏に浮かぶ。



50929 石垣島オモト林道